
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No. 109

April 2018

2018 年度大会は 10 月 13 日～14 日 首都大学東京にて開催されます

自由論題・パネル報告募集中

今年度のロシア史研究会大会は 10 月 13 日(土)、14 日(日)の二日間、首都大学東京で開催されます。共通論題提案は既に締め切られておりますが、自由論題報告・パネルの応募締め切りは 5 月 4 日(金)ですので、題目、概要を添えて事務局鶴見 (shukran_afwan(at)hotmail.com ※(at)は@に置き換えてください)宛にふるってご応募ください。(前号では 4 月 15 日(日)と誤って記載しておりました。訂正してお詫びいたします。)

また大学院生等による自由論題報告に対する交通費補助制度を設けております。詳細は最終頁をご覧ください。本年度も必要に応じて会場内託児・託児補助を実施する予定です。追って ML にてアンケートを行います。



(会場となる首都大学東京)

【12月例会レポート】

○研究会傍聴記(2017年12月16日)

伊東孝之

例会は東欧史研と合同で早稲田大学 16 号館 107 号教室で開かれた。合同例会はロシア史研始まって以来ということである。筆者はたまたま会費を払っているという意味で長く両方の研究会に属しているが、いずれについても熱心な会員ではない。今回のテーマについてはまったく門外漢である上に、とくに事前準備していたわけでもない。たまたま出席して、会の途中で担当者から頼まれて、迂闊にも傍聴記執筆を引き受けてしまった。はなはだ不適任であるが、自分の独断、偏見、無知を暴露して責めを果たしたい。

テーマは会員によって最近刊行された図書の合評である。具体的には福嶋千穂著『プレスト教会合同』(群像社 2015 年)と、井内敏夫編『ロシア・東欧史における国家と国民の相貌』(晃洋書房 2017 年)の 2 書である。いずれもモノグラフではなく、前者は史料解題、後者は論文集である。東欧史研の飯尾唯紀が前者、ロシア史研の池田嘉郎が後者を論評し、執筆者がリプライした。フロアから多くの発言があったが、後者については多くの執筆者が入れ替わり立ち替わりリプライしたので、いつになく賑やかな例会となった。

両書を選んだのは、おそらく合同例会にふさわしいようにロシア史と東欧史の両方に跨がるテーマの図書を求めたためだろう。しかしながら、合同教会(ギリシア＝カトリック教会、東方帰一教会)はウクライナには関係しても、本来のロシアには関係しないので、多くのロシア史研のメンバーにとってはなじみのないテーマであったかも知れない。

福嶋の著書はポーランド史叢書の第 1 巻である。実はこのシリーズは他の書店から刊行されていたのだが、その書店の倒産で群像社が引き継いだものである。しっかりとした刊行方針があり、ポーランド史の生史料を紹介することになっている。シリーズのどの書も最初に史料を紹介し、それに続いて解題を行うというスタイルをとっている。通俗書ではまったくなく、モノグラフ以上に固い学術書である。ただ、ページ数が厳しく制限されているので、解題でモノグラフのように敷衍したり、詳しい脚注を附したりすることはできない。

史料は、教会合同に臨んでキエフ府主教座の主教たちが起草した 33 ケ条からなる条件である。それは 16 世紀の末に現在のベラルーシとポーランドの国境にあるプレストで交わされた文書である。モスクワ大公国ははるか東方に位置し、ロシア帝国と称するのはまだずっと先のことだった。合同の試みは東西教会の大分裂以後何度もあった。正教会の聖職者は教会合同の理念を借りながら、実際にはポーランド＝リトアニア共和国における自分たちの地位を向上させようとした。しかし、共和国の世俗権力からは一貫して差別扱いを受け、ポーランド分割後ロシア帝国に併合された地域では徹底的な弾圧に晒された。信徒は現在のベラルーシ、リトアニア、ポーランドに多かったが、次第に当時ハプスブルグ帝国に属した西ウクライナ、スロバキア、ハンガリー、ルーマニアなどに広まった。

飯尾の質問は南北の違い、宗派化のパターン、研究環境の 3 つに関わっていた。①教会合同の試みは 17 世紀のバルカン半島、1646 年のウシュホロド、1697 年のトランシルヴァニアでもあったが、正教会の司教団はそれほど主体的に行動しなかった。なぜポーランド＝リトアニアではそれができたのか、それを明らかにするために 33 ケ条だけではなく教皇勅書、国王布告も訳出するべきではなかったか。②シリング＝ラインハルトの「宗派化」論と関連して、「宗派化」の試みは正教会でもあり、それと併行して合同教会でもあったように見える - 法廷や地方議会での活動、修道会(バシリウス会)、付属学校、セミナリア、民衆の信仰熱など - が、それ

は教会上層の主導だったか。③ハンガリー合同教会についてはニーレジハーザのセミナリアを中心に研究書、史料刊行が行われているが、ポーランド、ウクライナではどうか。

福嶋のリプライは次のようなものであった。①南方での教会合同については明るくないが、たしかにプレストでは正教会に一定の独立志向があった。ローカルな正教会指導者は社会的に上昇しようとするカトリックに改宗した方が早いし、実際に改宗する者も多かったが、そうすると一般信徒が取り残されてしまうというジレンマを抱えていた。紙数の制限で多くの史料は紹介できなかつたし、ラテン語史料は読めないで断念せざるを得なかつた。②「宗派化」論にも十分通じていないが、ポーランド＝リトアニア大公国の場合貧困シュラフタ出身の聖職者が中心であった。下層の一般信徒、農民に関しては史料がないし、おそらく意識もなかつたのではないか。③プレスト合同 400 周年を記念してポーランドで大量の史料、研究が刊行された。ウクライナでも翻訳や細かい研究が多く出るようになってきている。

フロアから多くの質問が出たが、前の方に坐っていた筆者にはよく聞きとれず、ノートもとれなかつた。筆者自身の感想を記せば、まず、18 世紀末にロストツキー府主教が元老院議員となっているという。とすれば、ポーランド分割がなかつたら合同教会の世俗的進出もあつたのではないか。次に、33 ケ条のうち教義にかかわるものはわずかに 2 つで、他は典礼という名の習俗に関わるものだったという。西欧で起きた宗教革命とはまったく性格を異にし、むしろロシアにおけるニコンの改革を想起させる。最後に、リヴィウはむしろ正教会の牙城だったのに、ある歴史的展開のせいで合同教会の本山となった。それは 18 世紀末にこの地を領したハプスブルグ家が合同教会をカトリック教会と同等に取り扱ったことだ。そのおかげで今日合同教会はウクライナの一部住民の国民的宗教となるという巡りあわせとなった。ウクライナ自体では「ウクライナ＝カトリック教会」と呼ばれている¹。



(左は著者の福嶋千穂氏、右は評者の飯尾唯紀氏)

井内編書は 12 本の論文からなっている。序章、あとがきを除けば、ロシア史関係が 6 本(赤松道子、草野佳矢子、高尾千津子、池本今日子、小森宏美、前川陽祐)、東欧史関係が 5 本(唐澤晃一、中澤達哉、井出匠、兼子恵実、白木太一)である。池田は 12 本の論文を的確に要約し、それぞれの問題意識に即して位置づけ、手際よく論評した。配布されたレジメは高い完成度を示しており、ほとんど論文といってよいほどである。各論文の学術的貢献について称賛の言葉を惜しまなかつたが、ところどころで問いを投げかけている。

¹ 中井和夫『ウクライナ・ナショナリズム - 独立のジレンマ』(東京大学出版会 1998 年)、105、113-115 頁。

ロシア史関係から取りあげると、ロシア正教会の司祭を取りあげた赤松論文について、東方正教会の枠組という規制は十月革命後の時期を除く改革論議においてどのくらいの重さをもったか。内務省の一部局の活動を通じて中央地方関係を分析した草野論文について、中央地方の一体化という官僚制のユートピアの本質は何か、1906年体制は統治にとってプラスとマイナスのどちらをより多くもたらしたか。19世紀におけるユダヤ人とドイツ人の黒海北岸入植活動を取りあげた高尾論文について、両者の「共生」の成果について、帝政当局はどのような評価を下したか、あるいはどこかの段階でそうした成果への関心を失ってしまったか。ミーニン＝ポジャールスキー像建立に対する皇帝アレクサンドルの姿勢を論じた池本論文について、ミーニンとポジャールスキーが体現する二つの路線の関係は、どこかの時点でいずれかの優位に終わるのだろうか。エストニア史学史における1905年革命を取りあげた小森論文について、「地方史的」・社会史的視点は歴史学の進展という点からは別の評価も可能になるのではないか。ドイツのロシア専門家オットー・ヘッチュを取りあげた前川論文について、ヘッチュのロシア論はある程度ドイツ論ではないか、とすると法治国家的西欧とは異なる今後の「ロシア独自の発展の道」とは何なのか、などなど。

次に東欧史関係を見ると、中世バルカンの免責特権を扱った唐澤論文について、セルビアとボスニアという事例は、より大きなスケールで見た場合「西欧」や「ロシア」と対置される共通の類型を形成しているのか。ハンガリー王国の国家概念史を取りあげた中澤論文について、中世・近世国家についての中澤の分析概念と礫岩国家論とをどう接続するか、礫岩国家論のみでパトリア→国民国家を説くのはやや説明不足ではないか。スロバキアにおける「国民」意識の成立を取りあげた井出論文について、従来の国民意識の伝播に関する議論とくらべてどこまでメリットがあるのか、諸フレームの想定は原初主義的視点と同様の実体化を示唆していないか。オーストリアにおけるドイツ人学校協会を取りあげた兼子論文について、同時代における反ユダヤ主義の台頭をどのように説明するか、民族活動よりも便宜によって社会的結合が拡大したとすれば、それはどういう意味をもったのか。ポーランドの歴史教科書を取りあげた白木論文について、1971年が分水嶺をなすということは一国史的叙述が相対化されつつあったのか、それともポーランドの自立性の表れであったのか、などなど。

最大の論点は方法論の問題であった。方法論については中澤が序章において簡潔にまとめている。それは国制史、国家概念史というアプローチである。実は評者の池田も先に『国制史は躍動する』という書²を編集しており、両者の立場は一致する。したがって、とくに論争はなく、互いに称賛しあうという関係であるように見える。問題は個々の論文がどの程度そのアプローチを意識的に採っているかだろう。本書の特徴は中澤が方法論問題を一手に引き受けている、他の著者はほとんどそれに触れていないことである。この点で池田編書とはやや異なる。先に紹介した池田の問いかけの多くはもう少し方法論を意識せよということであるのかも知れない。

筆者は法制史のアプローチとは伝統的に法学部で行われているような法制史研究に歴史学が歩み寄ったものかと考えたが、どうもそうではないらしい。それは従来社会、経済、文化などのアクターに焦点を合わせがちであったのを反省して行政のアクター、有り体に言えばお役人により焦点を合わせようということらしい。とはいっても、国家と社会を対抗関係で捉えるのではなく、むしろ一体として捉えるので、社会史、社会構造史でもあり得るようだ。それは国制史という制度化された分野ではなく、あくまで歴史学の一アプローチとしてとどまる。

本書で目立つもう一つの方法論的視角は礫岩国家論である。これも法制史のアプローチの一つといえるかも知れないが、それ独自の含意があるような気がする。また、池田と中澤のあいだには微妙な違いがあるような気がする。筆者は歴史理論についてまったく明るくないので

² 池田嘉郎・草野佳矢子編『国制史は躍動する — ヨーロッパとロシアの対話』(刀水書房 2015年)

立ち入って議論することはできないが、一つだけ触れるとすれば、ヨーロッパとロシアの関係である。池田は礫岩(複合企業)国家論、複合国家論、複合君主政論、帝国論などをすべて国制史的アプローチに含めるが、実際の分析ではあまり前者の概念群を使おうとしない。国制史的アプローチは「地域と時代を超えて適用することができる³」はずである。しかし、そのアプローチを提唱した先人はしばしば地域限定的に使用している。それを避けるために、池田は自分の編書にわざわざ「ヨーロッパとロシアの対話」という副題を付けている。ただ、普遍的に適用するためにはいろいろと工夫が必要なようだ。たとえば、ロシア史のためにヨーロッパ史にはない「強制団体」のような用語を使っている。

これに対して中澤はヨーロッパ=ロシア対比問題をそれほど意識していない。中澤は井内の「王国の王冠」論から出発している。それは王と特権層とによる国家権力の「分有」状態を表現するような国家概念である。礫岩国家とは国家の中の礫の組み替えや離脱をも想定する集塊の理論である⁴。たしかにケーニヒスバーガは、複合国家を「同等の権利をもつ複数の国家からなり、王冠への共通の忠誠と、双務的な交易の合意と心情によってのみ結び合わされた君主政」と定義する⁵。エリオットによれば、「複合王政とは、王権とさまざまな国の支配層との間の相互契約に基づいて構築されたもの」である⁶。また、グスタフソンによれば、礫岩国家とは君主と地方エリート間の交渉・合意に基づくパッチワークのような国家の概念である⁷。しかし、はたしてこの概念がロシア帝国やソ連にも同じ程度に適用できるだろうか。所収論文の多くがロシアや初期ソ連を扱っているからにはこの問題についての敏感さが求められるように思われる。

非常に有益な研究会だった。今後もこのような合同研究会が開催されることを望みたい。出席者はピーク時で35名くらいか。いつもよりも多かった。見慣れない顔触れがいたように思ったが、おそらく合同研究会であってお互いに知らないこと、多数の執筆者がいる書を取りあげたこと、報告者の大学院生も傍聴したらしいことなどが影響したのだろう。会後の恒例の懇親会は高田馬場の『マーレ・フェリーチェ』で開かれたが、こちらは20名くらいの参加であった。



(左は執筆者の一人の中澤達哉氏、右は評者の池田嘉郎氏)

³ 池田編、6頁。

⁴ 井内敏夫編『ロシア・東欧史における国家と国民の相貌』(晃洋書房2017年)、29-35頁。

⁵ H・G・ケーニヒスバーガ著、後藤はる美訳「複合国家・代表議会・アメリカ革命」、古谷大輔・近藤和彦編『礫岩のようなヨーロッパ』(山川出版社2016年)所収、48頁。

⁶ J・H・エリオット著、内村俊太訳「複合君主制のヨーロッパ」、前掲書所収、62頁。

⁷ ハラルド・グスタフソン著、古谷大輔訳「礫岩のような国家」、前掲書所収、86-90頁参照。

【新会員紹介】

2017年12月～3月の新入会員(1名)をお知らせします。

李 優大(2017年12月20日入会)

所属：東京大学大学院法学政治学研究科総合法政専攻修士課程

専攻・テーマ：ソ連民族政策(中央アジア・カフカス)

【献本について】

晃洋書房より、以下をご献本いただきました。

・森 宜人 編著、石井 健 編著『地域と歴史学－その担い手と実践』

【ニュースレターの電子化】

前号から紙媒体に加えて、電子媒体でもニュースレターを発行しております。数年後に完全電子化する予定です。また、バックナンバーは適切な編集を施したうえで、学会サイト上で随時公開する計画です。

【大会自由論題報告への交通費補助について】

例会交通費支給規程を準用し、大学院生等会員の研究活動を資金的に支援するため、遠方の会員(学振研究員を除く大学院生・非常勤)の自由論題報告に対し、交通費実費の片道分(上限有)を補助します。

ご希望の方は報告申込のメールに「交通費補助希望」と記入してお送りください。

ロシア史研ニュースレター
第109号 2018年3月26日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
(井上岳彦)
〒153-8902
東京都目黒区駒場3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻 鶴見研究室気付
